

「いじめのない学級づくりへ！言語活動で学活を充実させよう」

齊藤 優

1. はじめに

近年、いじめによる自殺のニュースを聞くことが多くなりました。私の周りでも、いじめが原因で不登校になってしまった子どものことを良く耳にします。私は、いじめが起こる原因の一つとして、子ども達の「市民意識」や「社会意識」が低くなってしまっているからだと考えます。いじめのない、一人一人が安心感をもって集団をつくるためには、集団の一員であるという自覚を持ち、そこに役割や責任を担う必要がある、という意識をもつことが大切だと思います。

今まではこのような「市民意識」や「社会意識」は、家庭で養われるものだったそうです。森田洋司氏は、「家庭は、人格のコアを形成する集団であるだけに、市民意識の基盤を幼い頃から体得させ、実践していくにふさわしい。ただ、そうはいうものの、家庭のなかを見わたしてみると、子どもたちに担わせる役割は、ほとんどなくなってしまっている。」と述べています。確かに、私がアルバイトをしている塾の生徒は、部活を終え帰宅するとすぐに塾に来ていますし、中には習い事をしている生徒もいます。昨今の中学生の多くには家事を手伝う時間は、ほとんどないように思います。家庭の中で集団を構成する力となる意識を育てたくても、このような現状を変えることは、とても難しいでしょう。

これらのことを踏まえると、学校においては、今後いっそう子どもたちの「市民意識」や「社会意識」といった、集団を構成する力を養っていく必要があります。そこで私は、特別活動、特に学級活動の充実を図る方策を考え、提案したいと思います。

2. 「特別活動」の重要性と優れた実践例

特別活動は「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」(学習指導要領より一部抜粋)ことを目標にしています。しかし、特に中学生にとっては、高校受験などの関係から、各教科の学習に意識が向きがちで、軽視されがちではないでしょうか。中には、学級活動においては、教師が主導となって話し合いを進めたり、学級委員などといった、決まった生徒が主導となって話し合いを行ったりすることが多いと聞きます。しかしそれでは、特定の子が話し合うばかりで、話し合いに参加しない生徒が存在してしまいます。全員が参加し、自分の役割を果たすことによって、自己有用感を

はじめ、一人一人が認め合える集団をつくることができますと思います。そのために、中学校でも特別活動、特に学級活動を充実させ、生徒一人一人の自己有用感とともに、集団を構成する力を養う必要があります。

実際に、福岡県の宗像市立玄海東小学校では、学級活動の充実に取り組み、校内の「荒れ」を改善することに成功しました。玄海東小学校では、「学級活動を通し、友だちと力を合わせて問題に取り組む経験を積む」を取り組みの一つに設定し、学級会で話し合っただけの活動は、必ず全員で実践することを続けました。そうすることで、子どもに一人では難しいことでも、力を合わせれば出来ると実感させて、学級集団の力を高められるようにしました。これは、小学校の取り組みではありますが、中学校においても、学級活動への取り組みを充実させることは、学級集団の力を伸ばすことに有効だと思います。

また、杉田洋氏は「学級は、育ちや価値観、能力、体力などが異なる子どもが集まる、小さな社会です。学級での集団活動を通し、社会で必ず必要とされる社会性や人間関係形成能力を身に付けさせる指導が求められます。」と述べています。生徒が安心感をもって過ごすことができる学級づくりをすれば、学力も含め人間力の向上につながると思います。

3. 充実した「学級活動」を進めるための提案

では、生徒が安心して過ごすことができる学級をつくるために、学級活動をどのように進めていけばよいのでしょうか。私は、教師や学級委員といった特定の間が進めるのではなく、4人で構成される計画委員を中心に進め、全員が参加できる学級活動の手法を推進します。4月に生徒を4人1グループに分け、各時間に割り振り、計画委員として学級活動の内容や活動方法を決め、中心となって進めてもらいます。計画委員を中心に決めて決めたことを、全体で共有し話し合いを進めていくことで、一人一人に役割ができ、全員が参加する学級活動を展開することができます。教師は1週間前に、担当の計画委員に声をかけ、内容や方法について提案します。主導権を握るのではなく、計画委員のサポートにまわります。そうすることで、子どもが主体となって話し合いを進めることができ、子ども達の自主性や役割をもつ安心感を養うことができます。

また計画委員を編成する手法に加え、私は学級活動にバリエーション豊富な言語活動を取り入れていくことを提案します。知識基盤社会が到来した今、知的活動の基盤やコミュニケーション、感性・情緒の基盤を育てる言語活動は、とても重要視されています。国語科を中心に、各教科・各領域で取り入れ、充実させることとなっています。文部科学省が

ら『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～』という指導資料が出されており、小学校編、中学校編とあります。しかし、この事例集の中学校編をみると、国語は15例も挙げられていますが、特別活動は2例であり、その中でも学級活動はたった1例しか挙げられていません。まだ実践が少ないのだと思われます。

私は国語を専門とした教師を目指す立場として、話し合い活動を柱とする学級活動においても、言語活動を積極的に取り入れていきたいと思います。学級活動における話し合い活動は、国語科における「話すこと・聞くこと」に共通する要素が多くあります。言語活動を充実させることで、国語科で学んだことを学級活動でも生かすことができると思います。そうすることで、生徒の社会意識を養うことができ、いじめのない学級をつくることの一步となるのではないのでしょうか。また、いつも学級全体での話し合いをするのではなく、多種多様な言語活動を取り入れることで、子ども達が楽しむことができ、今より学級活動での学びを重要視することにつながると思います。

実際に学級活動の時間において、どんな題材でどんな言語活動が生かせるか、私なりのアイデアとして、3例提案したいと思います。

(1)「パネルディスカッション」を用いた話し合いで学級のまとまりを高める

一つめとして中学1年生に対し、「合唱コンクールに向けて」というテーマで取り組む際、言語活動としてパネルディスカッションを取り入れることを提案します。初めての合唱コンクールに対して、中学校に慣れてきたばかりの1年生が、自主的にまとまって練習を行うことは難しいと思います。生徒の中には、部活動や習い事などで放課後に練習することが難しいこともあるでしょう。そこで計画委員あてに、合唱コンクールに向けての練習時間や方法を、他の生徒達から案を募集します。計画委員はそれをもとに、合唱コンクールに向けての練習時間や方法をプランニングし、プランA、B、Cなどをつくります。つくったプランを模造紙等パネルにまとめ、それを発表し、全体で意見交換を行います。どのプランがいいか、もしくはプランの改善を提案するなどして、合唱コンクールの練習プランを決めます。全員が参加できる練習プランをつくることを目標にするので、一人一人が自分の予定に関して意見を述べる必要があります。そうすることで、自然と全員が参加するディスカッションとなり、学級のまとまりが期待できます。

(2)「ワールドカフェ」を用いたグループ協議で意見交換を活性化する

二つめとして、中学2年生に対し「自己の適正・自分を生かす職業」というテーマで取り組む際、言語活動としてワールドカフェを取り入れることを提案します。ワールドカフェとは、複数人での討論の方法の一つで、与えられたテーマについて各テーブルで数人がまず議論し、次にテーブルホスト以外は他のテーブルへ移動し、そのホストから前の議論の内容を聞き、さらに議論を深めていくという方法です。ワールドカフェの特徴は、リラックスしたムードで行うことで様々な意見が出やすいこと、話し合いのメンバーが変わるので、一つの意見に関し多角的な視点から意見を得られること、などが挙げられます。私はこの特徴を生かしたいと思います。例えば、4人1グループを編成し、各グループ1つの模造紙を用意します。模造紙に線を引き、4つのスペースをつくり、自分の名前を書いておきます。そして、最初のグループでお互いの性格や長所、向いていそうな職業、ぜひやってほしい職業などをスペースに書き込んでいきます。その後、メンバーを入れ替えることを何度か行います。ワールドカフェでは班を移動しないホストがいますが、今回はホストをつくらず、どんどんメンバーが変わるように入れ替えていきます。3、4回ほどメンバーを入れ替えると、各スペースに11人～15人の自分に対しての意見を得ることができます。普段行動を共にすることが多いメンバー以外からも意見がもらえるので、自分のことを様々な角度から見るができます。今まで気付かなかった、自分の新しい一面を見付けることができるかもしれません。また、このような活動をすることを、計画委員を通して事前に生徒に伝えておけば、互いのことを知るために、今まで関わりのなかった生徒同士の交流も期待できます。

(3)「プレゼンテーション」で主体的な発表を促す

三つめとして中学3年生に対し、「進路を見据えた学習の改善」というテーマで取り組む際、言語活動としてプレゼンテーションを取り入れることを提案します。1学期の中間テストの結果を踏まえ、希望の進路に向けて自分自身の学習習慣を見直す必要があります。そこで計画委員は、各々の生活習慣に適した学習の仕方をプレゼンテーションします。例えば、集中できる時間や教科ごとにおける適した勉強のタイミング、勉強において朝型か夜型か、など学習にまつわる様々な方法やコツをまとめ、発表します。それを見た生徒は、自分のこれまでの学習習慣を振り返るとともに、これから期末テストに向けて、また高校受験に向けて、どのような学習のリズムをつくっていくかを個人で考えます。その後、4人1グループを組み、お互いの計画を検討し合い、互いにアドバイスをします。そうすることで、自分の計画の実現性を確認することができますし、他の人に話したことから、学習

への意欲をもつことができると思います。この活動は、担当の計画委員の負担が大きいですが、計画委員自身も良い情報を集めるきっかけとなるので、やる気はあるけれどなかなか成績が伸びない生徒や、進学校を目指している子を計画委員にすると、より良い効果が生まれるのではないのでしょうか。

4. まとめ

学級にバリエーション豊富な言語活動を取り入れることで、生徒の自主性や、全員参加により集団に対する役割意識が育つと思います。市民意識や社会意識の高まりは、自己有用感や集団への所属感などを生み、いじめのない学級づくりにもつながると思います。

私はこれから教師を目指すものとして、学びのつながりを大切にしたいと改めて感じました。今回、学級活動に言語活動を取り入れるアイデアを考えてみたら、国語で学んだことが学級活動でも生きることを実感しました。私は大学生になるまでは、学びは教科ごとであり、そこにつながりを感じることはありませんでした。しかし、大学で学んでいくうちに、学びは専門を超えてつながっていくものだの実感し、学ぶことが楽しくなりました。私はこの学ぶ楽しさを、ぜひ子ども達に伝えたいと思います。中学校では、教科は担当ごとに教師が変わってしましますが、それでも教師同士で連携し、工夫していくことで、学ぶ楽しさを多くの子どもに感じさせたいです。そして、学校においての学びが楽しくなれば、笑顔で学校生活を送ることができる子どもが増えると思います。私は教師になったら、より良い社会を自分たちで作っていこうという前向きな意欲や他の人たちと共同できる力を持った子ども達を育てたいと思っています。

(参考・引用)

『いじめとは何か 教室の問題、社会の問題』森田洋司著 中央公論新社刊

『VIEW 2 1』 ベネッセ教育総合研究所 <http://kibunokai.net/report/> 2014.9.30 確認

「学級活動（１）のきほん」 秋田県大仙市大曲小学校

<http://www.edu.city.daisen.akita.jp/~om-kyokusyo/work/pdf/gakkyukatsudou.pdf>

2014.9.30 確認